

# 医者も知らない平穏死



連載⑧

〈長尾和宏〉長尾ク  
リニック院長、日本  
尊厳死協会副理事  
長、著書に『平穏  
死』10の条件など。

末期のがん患者さんの場合、数カ月単位の余命は分かりませんが、「旅立ちまで、あと数日やろな」という段階になればだいたい分かります。

在宅医療の現場では、患者さんに話が聞かれないところで、ご家族にそのようなことをきちんと伝えま  
す。皆さん、聞きながら涙を流されます。

一日一日を大切に寄り添う生活もいよいよ大詰めに

## 死ぬ直前まで抗がん剤

なりません。まだじくなっていないのに、「(患者さんも)満足していると思えます」といった感想を述べられることは珍しくありません。

気の毒なのが、「駆け込み在宅依頼」でいらっしやうたご家族です。

診察終了間際に飛び込んだきたSさん(60)。2歳下の奥さんが末期の肺がんとのこと。急いでご自宅に伺うと、奥さんが朦朧とし

た状態で布団に横たわっていました。一目で余命1〜2日と分かるくらい重篤な状態です。

Sさんが言うには、奥さんは週1回、専門病院の外来で抗がん剤治療を受けていたそうです。最後に抗がん剤治療を受けたのは、1週間前。その時も奥さんの状態はかなり悪かったそうです。そして3日前からボーツとし

た状態になり、食事も取れなくなつて……。  
「いつまで抗がん剤治療をやるつもり!? 死ぬまでですか?」

Sさんは、私のこの言葉で目が覚めたそうです。し



(写真はいメージ)

「緩」と急変した時の連絡態勢づくり」くらいしかありませんでした。結局、奥さんは意識を取り戻すことなく、翌朝早々に旅立たれました。

「ギリギリまで抗がん剤治療をする必要はなかったんちゃうか。早く抗がん剤治療をやめて、好きなことをさせたつたらよかつた」

そう泣きじゃくるSさんに、返す言葉がみつかりませんでした。